

閉塞性動脈硬化症

(ASO)へいそくせいどうみやくこうかしょう

脚切断に至る動脈硬化をカテーテルで治す

閉塞性動脈硬化症 (ASO) は、動脈硬化で血管が詰まり、脚の血流が悪くなる病気だ。重症化すると脚切断に至るばかりか、命にもかかわる。カテーテルによる血管内治療では、新しい器具が普及し、治療成績が向上している。

痛くても積極的に歩くことが大切

ASOに特徴的な症状は、「間欠性跛行」と呼ばれるもの。一定の距離を歩くと脚が痛くて歩けなくなり、休むと歩けるようになる。「ASOで痛むのは、歩くときに使う筋肉です。休んでいる間に、不足する血液が補充されるので、楽になります」(同)

ASOの間欠性跛行は生活に支障がなければ急いで手術を受ける必要はない。生活習慣を改善したうえで、禁煙と動脈硬化の原因となる併存疾患の治療を徹底しておこなっていく。間欠性跛行が生活に支障をきたす場合もまずは、運動療法が推奨される。

生活に不便を感じるようなら、次の選択肢として血行再建術という治療がある。血行再建には、主に自分の静脈で血液の通り道を作る外科的バイパス術と、血管内にカテーテルという管を入れ、バルーン(風船)やステント(金属製の筒)で狭くなった血管を広げる血管内治療がある。

動脈硬化症は、進行すると血管が狭くなったり詰まったりする、全身に起こる病気だ。脳の血管が詰まれば脳梗塞、心臓の血管ならば心筋梗塞などの発症につながる。脚の血管に起こる動脈硬化がASOだ。末梢動脈疾患 (PAD) と呼ばれることもある。

山王病院・山王メディカルセンター血管病センター長で国際医療福祉大学教授の宮田哲郎医師はこう話す。「二つの面から怖い病気です。まず脚の血管の詰まりがひどくなると血流障害で

「ASOで痛むのは、歩くときに使う筋肉です。休んでいる間に、不足する血液が補充されるので、楽になります」(同)

「痛くなるまで歩き、休んで痛みが引いたらまた積極的に歩くことの繰り返しで治療となります。この運動療法を1日30分、週3回、3カ月以上繰り返せば、多くの患者さんが歩ける距離が延び、不自由のない日常生活を送れるようになります」(同)

現在の日本のASO治療は「末梢閉塞性動脈疾患の治療ガイドライン(2015年改訂版)」に準じておこなわれることが多い。作成時の合同研究班の班長を務めた宮田医師が血行再建術選択の目安を説明する。「骨盤内の腸骨動脈、もも

で治療方針が異なります。腸骨動脈は、太い血管なので血管内治療優先。大腿動脈も血管内治療で対応できるケースが増えています。膝下動脈は細い血管なので血管内治療の成績はまだ悪く、手術ができる状態の患者さんにはバイパス術をおこないたいところですが」

テントなどの治療器具の進歩がある。「血管内治療の進歩は著しいです。ただ、腸骨動脈でも細い部分を無理やり広げると、血管が裂けて大出血を起こす危険もあり、いたずらな適応拡大は危険です。心臓血管外科専門医や脈管専門医が常勤し、万一のときの外科のフォロー態勢がしっかりとっている病院で治療を受けることをお勧めします」(同)

「当初はASO外来や重症下肢虚血外来という名称を考えましたが、より多くの患者さんに受診してもらえるように、脚に関する疾患をすべて扱うことにしました。仮に水虫であれば、皮膚科に紹介します」

大動脈領域も血管内治療で血管を開通させること自体の成績は上がっている。「血管内治療は、まずカテーテルを導くために血管の中にガイドワイヤーを通していきませんが、体表エコーや血管内超音波を使用することで血管の真ん中にワイヤーを通せるようになりました。さらにワイヤー自体も硬い材質のものや高い気圧で膨らませるバルーンが登場し、ある程度の石灰化病変にも立ち向かえるようになってきています」(同)

最近、平野医師の元に心臓血管外科から治療の依頼があった。膝に近い浅大腿動脈に石灰化を伴う血管の詰まりが確認されたが、全身状態および血管の状態が悪く、外科的治療ができなかった。硬いガイドワイヤーや高耐圧バルーンを駆使した血管内治療を施行した結果、血流を回復させることができたという。

脚の血管と血管内治療

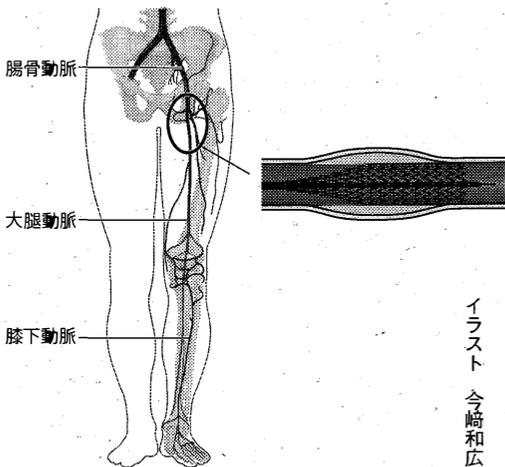


イラスト 今崎和広
ステントやガイドワイヤーの進歩で、腸骨～大腿動脈の病変は血管内治療で対応することが増えている

「腸骨動脈領域は、ステントさえ置ければ成績は担保されています。血管が狭く

「病変を削り取る器具はほとんどの国では使用できず、強い石灰化病変には手を出せません。また、再狭窄を

「大動脈領域で使える薬物溶解性バルーンの治験が終わり、来年には使用できる見込みで、再狭窄予防に貢献することが期待されます。現状では大動脈領域は依然として再狭窄が問題となっているため、将来バイパス術をおこなう可能性を考え、事前に外科と話し合い、対策をとることが重要と考えます」(同)

◎次回は「双極性障害」です。予定は変更する場合があります。●本欄あてに、いろいろな病気についての質問や闘病体験を、手紙、電子メール(wab@asahi.com)またはFAX(03-3542-1991)でお寄せください。